

**交信かく乱用フェロモン剤に影響されないナシヒメシンクイの発生予察手法**

交信かく乱使用地域では、サクラを寄主植物として、ナシヒメシンクイのフェロモントラップによる発生予察が可能である。また、交信かく乱剤使用モモ園では、新梢芯折数による予察手法が有効である。

農業研究センター果樹研究所病虫化学研究室（担当者：杉浦直幸）

**研究のねらい**

県内のナシ・モモ産地では、ナシヒメシンクイの被害抑制のために交信かく乱剤が導入され、その導入面積も増加傾向にある。一方、交信かく乱剤の使用拡大に伴い、交信かく乱剤使用地域では本種雄成虫の捕獲効率が著しく低下する。そこで、交信かく乱剤に影響されないナシヒメシンクイの発生予察法を確立する目的で、代替寄主植物であるサクラでのフェロモントラップ調査、モモの新梢芯折数調査を行い、それらの予察手法としての有効性を検討する。

**研究の成果**

1. 交信かく乱剤使用モモ園と近接したサクラ並木では、フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺消長のパターンは近似する（図1）。さらに、ナシヒメシンクイの各世代の発生ピークは、越冬世代の誘殺ピークを起算日として有効積算温度で予測された発生ピークとほぼ一致する（図1）。
2. モモにおけるフェロモントラップによる誘殺数と新梢芯折数の発生消長には、共通した発生ピークが確認される（図2）。また、新梢芯折調査は、交信かく乱剤設置下でも発生消長が把握できる（図2）。

**普及上の留意点**

1. 県内のナシヒメシンクイの発生予察調査は、3月中旬頃から10月中旬頃まで行う。
2. 各世代の発生消長が重なり発生ピークを正確に把握できない場合は、越冬世代の発生ピークを起算日として、発育零点（11.1℃）と有効積算温度（384.0日度）によって発生ピークを推定する。

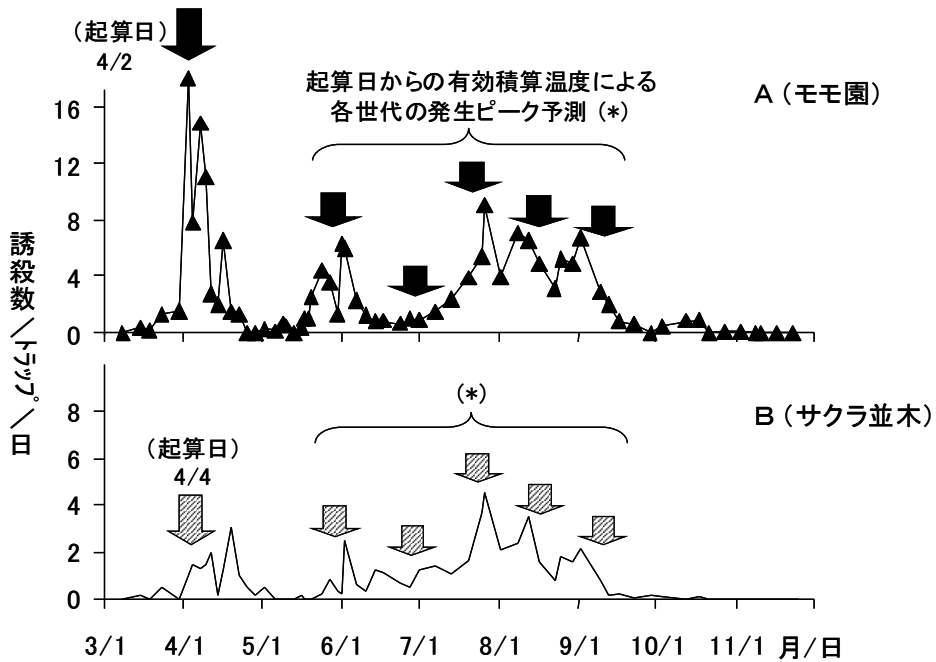


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイ誘殺数の季節的消長 (2011年)

注1) 果研内の慣行防除モモ園(A)、無防除サクラ「ソメイヨシノ」並木(B)で調査。矢印は越冬世代の誘殺ピークを起算日とし、有効積算温度で予測された発生ピークを示す。

注2) モモ園(A)とサクラ並木(B)の距離は約250m。

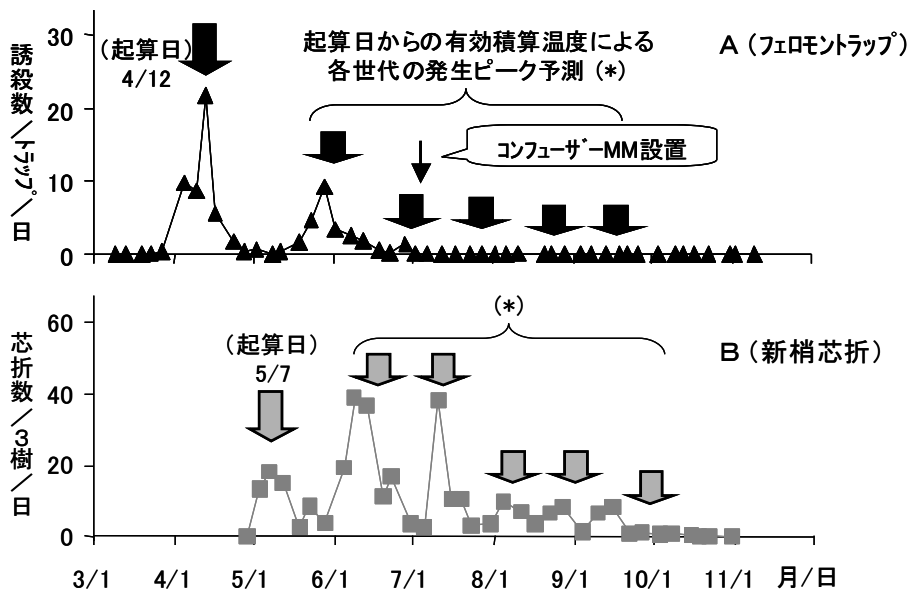


図2 フェロモントラップによるナシヒメシンクイ誘殺数(A)、新梢芯折数(B)の季節的消長 (2012年)

注) 果研内の同一の慣行防除モモ園で調査。矢印は越冬世代の発生ピークを起算日とし、有効積算温度で予測された発生ピークを示す。